



「きっとこっちだよ!!」

コト

目的地へと走るコート。

しかしいくら探せども、そこでプレゼントを見つけることは出来なかった。



コト

「ぐぬぬ……」



フド

「降参だね……アンバーおねえさんに教えてもらおう」

フドに連れられ、本部へと向かうコート。



アンバー

「あばばばば」

探し回っている間に祭りも終盤。

アンバーの泥酔も最高潮に達していた。

ブルーシートの中心で横たわる彼女は、まるで死んでいるようで。

……とっても愚かだった。



コト

「こんな人に頭を下げたくないなあ……ん？」

ふと。違和感。

アンバーが倒れているブルーシートになにか……。

隠したと言っていた、プレゼントと思わしきものが置いてあるではないか!

隠したと言っていた段階で酔っていたアンバー。プレゼント。情報がつながっていく。



フド

「……この人、やってないかなあ」



コト

「……もらっちゃおうか」

突然のことに冷や水を浴びせられた二人は、アンバーを放置してお祭り会場を後にした。



フド

「ぜったい途中でお酒もらってああなったよね」



コト

「ほんとうにあのひとはバカ酒飲み」

ふたりはすっかり暗^{くら}くなった道^{みち}を歩^{ある}く。

街灯^{がいとう}に照^てらされて見え隠^{みかく}れするフードの表^{ひょうじょう}情^みを見つめながら、コートも歩^ほを進^{すす}める。



「今回のプレゼントはなんだったんだろう」



「せっかくだし帰^{かえ}るまえに開^あけちゃう？」

はたと、街灯^{がいとう}の前^{まえ}で立^たち止^とまる。

ぺりぺりと包装^{ほうそう}を開^あけるとそこには絵本^{えほん}のようなものが入^{はい}っていた。



「なぜ？」



「タイトルは『ぼろ布^{ぬの}のハンス』だって」



「作者欄^{さくしやらん}は……書^かいてないね、まさかアンバーおねえさんの手^て作^{つく}りだったり？」

ぺらり。

『ぼろ布^{ぬの}のハンス』

あるところにとってもポロポロなお姫様^{ひめさま}がいました。

なんたって従者^{じゅうしゃ}に裏切^{うらさ}られて川^{かわ}に突^つき落^おとされてしまったのですから。

オシャレなドレスはびしょぬれ、高^{たか}い靴^{くつ}はヒールが折^おれて泥^{どろ}まみれ。

綺麗^{きれ}い顔^{かお}だって濡^ぬれていましたが、そこに涙^{なみだ}はありません。

お姫様^{ひめさま}は川^{かわ}から出^でると濡^ぬれた服^{ふく}を絞^{しぼ}って自^じ分^{ぶん}の影^{かげ}に被^{かぶ}せ、こ^いう言^いいました。

「あなたも寒^{さむ}かったでしょう？ さあ、温^{あたた}まりなさいな」

彼女^{かのじょ}には友^{とも}がおりました。

その友^{とも}は喋^{しゃべ}れず— 姿^{すがた}も誰^{だれ}にも見^みえませんが—。

いつでも、いつだって、自^じ分^{ぶん}の側^{がわ}にいてくれました。

彼女^{かのじょ}は友^{とも}達^{だち}がいればどんな困^{こん}難^{なん}にだ^たって立^たち向^むかうことができました。

神^{かみ}様^{さま}が見^みてなくな^なって、光^{ひかり}に照^てらされなくな^なって。

いつでも、側^{がわ}にいてくれました。



「……どうい^いう意^い味^みなんだろう」



「複雑な文章なんて大抵中身が薄いことのカムフラージュだよ！」



「そんなこともないと思うけどなあ……」

今からアンバーおねえさんに意味を聞きに戻る気にもなれず、
再び歩き出した二人はすぐに立ち止まった。
目の前に立ち並ぶ沢山の街灯が坂を照らしている。
この坂を登ればコートの家、下ればフードの家だ。



「あ、もう着いちゃったか」



「うん！明日は始業式だから寝坊しないようにね！」

コートの言葉にぴくりと反応するフード。



「あ、まだ上履き洗ってないや」



「乾かす時間が絶望的じゃん」



「急いでブラシしないと……」

慌てて取り乱すフードをほほえましく思いながら、コートは坂に足をかけた。



「また明日！」



「来年も3人でお祭りに行こうね！」

フードの後ろ姿が小さくなっていく。

電灯の灯りに照らされながら、私は暗闇に消えていくフードを見送った。

今日のお祭り、楽しかったな。

家に帰った私は微笑みながら、寝る支度をするのであった。

夜が更けていく……。